

ジャッジマン

福島県立福島明成高等学校 生物生産科 3年 高橋 歩夢

私の両親は福島県で酪農経営をしています。自分の時間を見つけては、両親の手伝いをしており、人より多くの時間、牛の姿を見てきました。

この経験を活かして、昨年開催された日本学校農業クラブ連盟主催の「家畜審査競技会 乳牛の部」に出場し、優秀賞に入賞しました。

今年も「家畜審査競技会」が行われることになり、大会までの間、学校で乳牛の審査の方法について一から学ぶ事になりました。

乳牛を審査するにあたって、チェックすべき箇所が大まかに分けて4つあり、「外貌と骨格」「肢蹄」「乳用強健性」「乳器」というものがあります。ここから、見るべき箇所を細分化し審査していきます。例えば、何百キロという巨体を支える肢。肢はO脚やX脚になっていないまっすぐなもの。乳牛の命とも言える乳器。乳器は発達がよく、弾力性に富み付着の強いもの。この他にも顔や蹄・腰・尻等々。見るべきところがたくさんあります。家に帰宅するといの一番に牛舎に足を運び、当日のシミュレーションも兼ねて、1頭ずつプロのジャッジマンになったつもりで審査をしました。

いよいよやってきた大会当日の朝。「最優秀賞をとる」と去年のリベンジに燃えつつ、会場へ向かいました。会場に無事着くと、審査の順番を決める抽選が行われ、私は最終組にエントリーされました。そわそわ落ち着かないで、他の組が終わるのを待っていると、突然降り出してきた大雨。なんともいえない嫌な予感を抱きつつ、迎えた審査の順番。今まで勉強してきたことを思い出しつつ、1頭1頭の審査をしていきました。そしてついに迎えた結果発表の瞬間。自分の名前が呼ばれることはありませんでした。

私は、家畜審査の勉強から乳牛の見方は勿論のこと、経済動物の厳しさも学ぶことになりました。

経済動物は、犬や猫のような愛玩動物とは違い「結果」「成績」が求められる動物です。家畜審査の勉強で乳牛の見方について学んだ時、乳器は発達がよく、弾力性に富み付着の強いものが良いとされています。なぜなら、泌乳量が多くなるからです。この他の箇所でも、良いとされているものの理由は、何らかの形で「結果」や「成績」に結びついているからです。

私自身、幼いころから牛の姿を見てきました。幼いころは、牛の姿を見ては「可愛いな」と、身近にいた牛のことを愛玩動物のような感覚で見えていました。しかし、今は違います。牛の可愛さを見ると共に経済動物としての「価値」をはかることができるようになったのです。

私は将来、両親が経営している酪農を継ごうと思っています。継いだ暁には、牛舎の設備を整えて今より快適な作業ができるようにしようなどと夢は広がるばかりです。また、競り市場に

出向いて牛を競り落とすときも、家畜審査の勉強で学んだ牛の見方をもとに、今よりも牛を審査する際の「審査眼」に磨きをかけ、経営価値のある牛を自分の手で競り落とそうとも思っています。

このように、自分の将来について夢を広げていきたいところですが、私の大好きな福島はそれすらも許してくれないようです。

家畜審査を終えたその日の夜。自分のふがいなさに落胆しつつ、大会の結果を両親に報告しました。すると、このような言葉が返ってきたのです。「人生の中で上手いかないことの方が多いいんじゃない？ 酪農だって動物が相手だから、想定外のことがいっぱいあるのだよ。何かに躓いたり、失敗する事は誰にだってあるのだし、むしろ失敗する事は次に大きくなるためにどうすれば良いか学べるチャンスだと思うよ」

東日本大震災、原子力発電所の事故から5年が経過し、福島の酪農家は高齢化と後継者不足も重なり減少し続けています。一方で、メガファームが建設され、福島の酪農を支える大きな希望となっています。その中で、専業酪農家として苦勞しながら酪農経営を続けている両親。そんな両親から発せられた言葉はもしかすると、私を元気づける為の言葉と共に、自分達を奮い立たせる為の心の叫びではないのかと感じました。

また、将来私が酪農経営をするにあたり、強い心構えがなければやっていけないと、身が引き締まる思いでした。だからこそ、私が就農する際のビジョンをしっかり持たなくてはなりません。

そのビジョンとして、後継牛は現在と同様に自家育成を主体にしたいと思います。数年前から性選別精液を使い始め、コンスタントに後継牛を増加させることができています。同時に繁殖和牛が少ないことから、和牛受精卵移植にも積極的に取り組んでいきたいと思っています。この受精卵移植を行うためには、家畜人工授精師の資格を有していなければなりません。そこで、私自身が受精卵移植を行えるようになるためにも、進路先として決めている大学に入学し、そこで家畜人工授精師の資格を取得したいと思います。

次に、購入飼料の高騰が酪農家にとって大きな問題となっています。今年に入ってから発生した、熊本地震や局地的なゲリラ豪雨などの急激な気候の変化は日本だけではなく、世界的に見ても珍しくありません。私の両親が経営している牧場では、米国産の乾草などを購入しています。しかし、近年、米国は深刻な干ばつを受けており、牧草の栽培にも大きな影響を与えていると聞きます。実際に入荷した牧草を見てみると、品質にばらつきがあると感じるのです。また、デントコーンはバイオマス燃料にも使用されることとなり、飼料用として使える量も少なくなっています。これらのことを踏まえて、今後、益々海外から安定して牧草を輸入することができなくなるのではないのかと危惧されています。

そこで、私の牧場では、完全国産の飼料米を輸入乾草の代わりの飼料として使用して

います。飼料米は輸入乾草と比べるとコストが安く、尚且つ、水田活用を通して地域の活性化に貢献できる利点があります。

このように、目まぐるしく変化し、何が起こるか予想もできないこの時代、新しい意識を持った酪農家になっていかなければなりません。その時代にあった経営の仕方や考え方。地震などの自然災害にも負けない経営者。いかなる時代の荒波に揉まれても、自身の目指すべき経営者になるため、いかなる時も適切な判断「ジャッジ」を下せる経営者になりたいです。
